

「博多ひばり」古希の熱唱



美空ひばりさんの歌を熱唱する「博多ひばり」さん。21日午後、福岡市早良区のももちバリスで、岩崎忠彦撮影

開店21年中洲のママ初舞台

生まれて初めてのスポットライトを浴びながら、古希を迎えた生涯を振り返り、涙をこぼした。福岡・中洲のネオシブで生きとじた美空ひばりさんが、初の歌謡ショーで披露したのは、心を交えてきた美空ひばりの歌だった。昭和を彩った名曲の数々は、戦後を生き抜いてきた600人の観衆のこころを揺さぶった。(古田大輔)

「私たちが燃えた太陽だから、真夏の海は恋の季節なの(真赤な太陽)」。21日、福岡市早良区のももちバリス大ホール。濃い紫地に花柄をあしらった振り袖と金色の帯姿で登場した平さんが、威勢のいい声で夏の恋を歌うと、60代以上がほとんどの客席が一気に沸いた。一曲ごとに拍手がおこり、涙を流す人たちも。

「私たちの年代はみんなね、ご飯も好きに食べられんまな昔姿はしてきたけん。一生懸命歌うぞ。『頑張れ』って気持ち込めこれ」。ひばりと同じ1957年、大分県中津江村(現・日田市)で生まれた。5歳で父、8歳で母を亡くし、師匠として小学生のころから屋外にまき守の奉公に出かけた。中学卒業後は、旅館の

「苦勞した分歌がしみる」

女中として大分県や福岡県を転々。20歳で中洲の中華料理店に勤め、23歳で結婚。息子が生まれたのが2年後に離婚し、キヤバールのホスエスだ。40歳のころ、こころごためた貯金をはたき、念願の「軒家を建てた。しかし、3年後、火事で全焼。自殺を考えたこともある。思いとどまらせた。母の交えに合ったのは、母も好きだったひばりの歌だった。」「生まれながらに生き抜いて、踏んたにはえる草のよな、強い強い女になりました(雑草の歌)」。49歳のとき、今も輝けるスナック「らるわ」を聞いた。だが、もう若くない。とるまてをを呼ぶか。歌に救われた。キヤバシ時代から歌席は評判で、プロ歌手の奉公した歌もこともあった。スナックでも、慣れ親しんだひばりの曲が人気を呼んだ。冗談で名乗った「博

多ひばり」の名が定着した。開店から21年間、休日はほとんどない。息子は独立して孫も2人いるが、一人暮らしを続けるから、毎晩店に立つ。「誰もおしえたわけじゃない。好きで選んだ道なのさ(この道を行く)」。7年前、病院などで慰問活動を続けるNPO法人「博多美空(福岡市)を知り、活動に加わった。「博多ひばり」の名を冠して歌い、人気を呼んだ。今回のショーも笑い歌の主演。美空ひばりの主演の周年に合わせた。「ひばりちゃんに歌と一緒に書きたけん、みんないるんならこぼれ出さずにおもてるたい。昔姿したおかげで、歌が心にみるよ」。28曲目。時間半にわたったショーの最後の曲は「川の流れるよな」。よきほこ道も、曲がりくねった道。地図さえない。それもまた人生